

## 【論文】

井伏鱒二〈土佐もの〉の考察  
——「無人島長平」を中心に——

芋生裕信

(二〇一八年九月二八日受付、二〇一八年十二月一七日受理)

Masuji Ibuse's Tosa Stories Reconsidered: A Study of  
—— Chouhei in the Desert Island (Mujintou Chouhei) ——

Hironobu IMOU

(Received: September 28, 2018, Accepted: December 17, 2018)

## 要旨

井伏鱒二の〈土佐もの〉と呼ばれる作品群のひとつ「無人島長平」をとりあげ、まず作品背景である土佐旅行の実態や典拠との関係を確認した。次に長平に関する文献を整理し、井伏の描く長平像の特異性を押さえた。そして、これまで『ジョン万次郎漂流記』への「つながり」として位置付けられる程度の評価であった「無人島長平」について、〈土佐もの〉の代表作「へんろう宿」との共通性を見出す新たな読み方を提起した。

## Abstract

This essay examines "Chouhei in the Desert Island (Mujintou Chouhei)," one of the Tosa stories written by Masuji Ibuse, especially focusing on the relationship between the story and the contemporary trend in the Tosa tour. Although "Chouhei in the Desert Island" has been a transitional piece that led up to *John Manjiro, the Castaway*, the present study suggests a new approach to the story, showing the hitherto unnoticed similarities between it and another famous Tosa story, "Henrou Yado."

## キーワード

井伏鱒二・「無人島長平」・漂流・『ジョン万次郎漂流記』・「へんろう宿」・災害

## Key word

Masuji Ibuse, shipwreck, "Chouhei in the Desert Island (Mujintou Chouhei)," *John Manjiro, the Castaway*, "Henrou Yado," disaster

## 学位

高知県立大学名誉教授 文学修士

Professor emeritus, University of Kochi (Master of Arts)

## 一、はじめに

井伏鱒二の作品の中に〈土佐もの〉と呼ばれる三十数編の文章がある。その多くは、井伏が師事した高知出身の作家・田中貢太郎とのつながりから生まれており、とくに昭和十年から十八年にかけておこなわれた五回の高知訪問<sup>1)</sup>にもとづく小説やエッセイがその中心的部分を占めている。〈土佐もの〉の中でよく知られている小説としては『ジョン万次郎漂流記』(昭和十二年、直木賞受賞)や「へんろう宿」(昭和十五年)などがあるが、あとは土佐旅行記、土佐見聞記ふうの短いエッセイがほとんどである<sup>2)</sup>。

その土佐旅行記ふうの文章の中に「無人島長平」「無人島長平の墓」(ともに初出は昭和一〇年、「無人島長平の墓」はのちに「長平の墓」と改題された)と題するものがあり、この二編はこれまでの井伏研究では、井伏の漂流民への強い関心の一例として、また二年後の直木賞受賞作『ジョン万次郎漂流記』への「つなぎ」として位置付けられている程度である。しかし、この二編は単に「つなぎ」とするには惜しい、もう少し井伏らしい特徴が読みとれる文章として評価できるのではないか、また井伏短編の中でも代表作として評価の高い「へんろう宿」との関連性も掘り起こせるのではないか、そのような狙いのもと「無人島長平」を検討していきたい。なお、「無人島長平」と「無人島長平の墓」は別々の媒体に発表されているが、内容は連続しているもので、一つにまとめた場合は「無人島長平」と表記して扱うこととする。

## 二、「無人島長平」の背景、概要

昭和十年(一九三五)五月の最初の土佐旅行の直後、井伏は「無人島

長平」を『中外商業新報』(五月二八〜三〇日)に発表するが掲載しきれず、残りの部分を「無人島長平の墓」(末尾に「一〇年六月一日」の日付あり)と題して同年八月一日の『作品』に載せた。

そもそも長平とは江戸時代後期の土佐岸本の船乗りで、二十四歳の天明五年(一七八五)嵐のため仲間とともに四人で漂流し無人島に漂着するが、ただ一人十三年ぶりに生還し、藩から野村姓を賜り、人々からは〈無人島長平〉とあだ名された人物である。これは、のちに〈ジョン万次郎〉と呼ばれる少年・万次郎を含む五人の漁師が流され、同じ無人島(鳥島)に漂着する出来事(天保一二年(一八四一))の五十六年前のことである<sup>3)</sup>。

〔無人島長平〕の構成としては、作者が土佐旅行で見聞した史跡・旧跡などを話題にする冒頭部分と長平を中心とした漂流・漂着・孤島での苦難の生活・そこからの脱出および生還を綴った後半部分とで組み立てられている。まず土佐旅行記ふうの冒頭部分に目を向けてみよう<sup>3)</sup>。書き出しは次のようになっている。

先日、私は土佐の名所見物に出かけ諸所方々を見物してゐるうちに、たまたま宇多の松原といふ海岸に「無人島長平」の墓が残つてゐるのを知ることができた。長平は土佐の国の船頭であつたが航海中に漂流して(天明五年正月から寛政九年六月まで)無人島に棲息し寛政十年正月廿九日、十三年ぶりで生れ故郷の土佐に帰つて来た。その墓は宇多の松原の墓地に今も残つてゐて、その小さな碑面には「無人島野村長平」と記してある。墓の右側には「文政四巳年」左側には単に「四月八日」と記されてゐる。

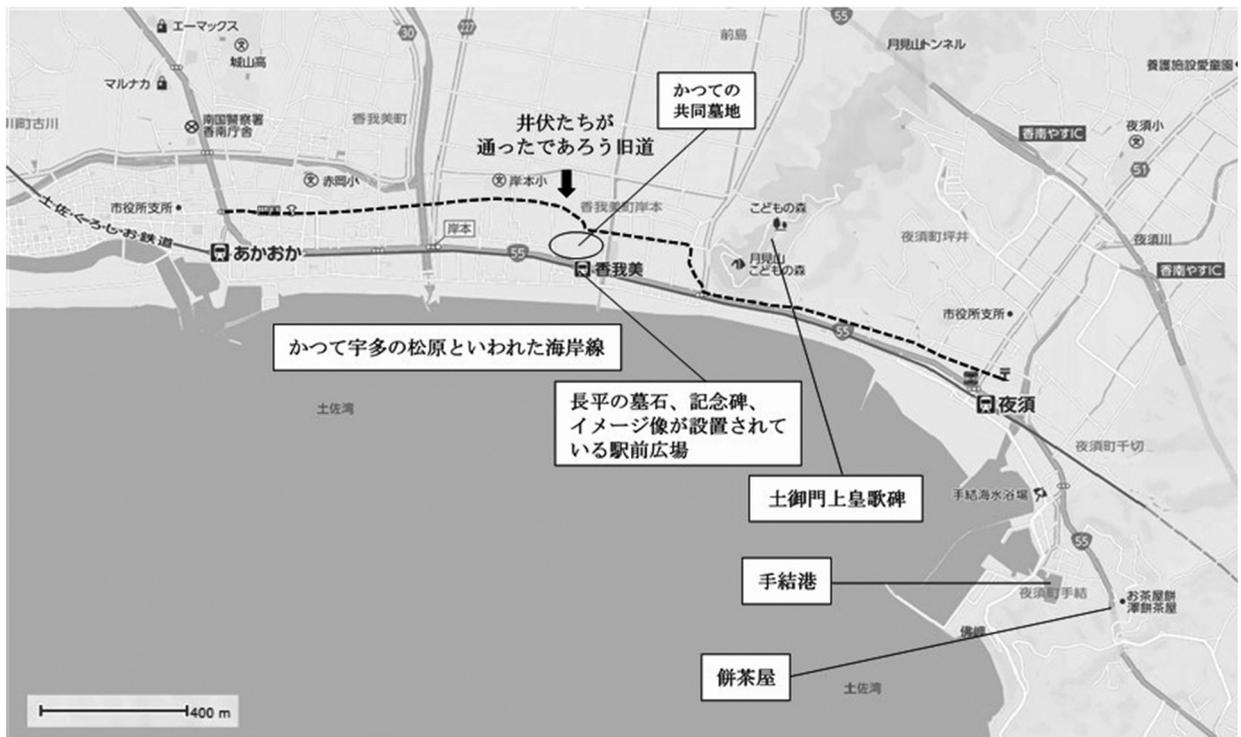
「土佐の名所見物」をしているうちに、宇多の松原の一角で偶然長平

の墓に出会ったという書き出しである。冒頭部分に出てくる「名所」は、「土佐日記」に記されている宇多の松原（従来、今日の赤岡、岸本方面の海岸と考えられてきた）のほか、野中兼山が開鑿に貢献した手結の港、江藤新平が佐賀の乱に敗れて逃れる途中立ち寄った餅茶屋、承久の乱で土佐・阿波に配流になった土御門上皇ゆかりの月見山などで、これらは高知市の東方二十キロメートルほどの比較的狭い地域に集まっているいわば「定番」の名所である（下図参照）。

井伏の文章は、こういった名所旧跡を巡る気ままな旅の途中、たまたま長平の墓に出会った、という書きぶりになっている。しかし井伏の実際の旅行はこの文章の趣とはだいぶ異なるようで、その点は先に注（2）に挙げた前田貞昭氏の研究（「井伏鱒二の土佐への旅―『博浪沙』招待旅行と井伏紀行文」）によって明らかにされている。

それによれば、井伏の昭和十年五月と同十四年四月の二度の土佐旅行は、当時の人気作家田中貢太郎が自身が主宰していた随筆雑誌『博浪沙』の若手同人たちを連れた里帰り旅行で、迎える側の高知では実業家や新聞社が中央文壇一行の歓待に相務めたとのことだ。つまり二度の土佐旅行は、一言で言えば「豪勢な招待旅行だった」わけである。

井伏の土佐紀行文の印象と実際の「豪勢な招待旅行」との隔たりに関して、前田氏は、まず「井伏の土佐紀行文は、田中貢太郎を中心とした博浪沙一行の旅であることや、地元の新報社・実業家たちに招待された豪勢な旅であったことに全く言及しない」と押さえたうえで、「旅に出たいと願う性分に根差した一人旅のような記述で始まる冒頭が端的に示すように、井伏はおのれ一箇の好奇心に映った土佐の風土・人間・歴史を軸に紀行文を綴る」と述べている。「一人旅のような記述で始まる冒頭」とは同じ土佐旅行をもとにした別の文章「初夏の室戸岬」（初出は昭和一〇年五月二六日、『サンデー毎日』）についての指摘だが、これはその



〔無人島長平〕 関連地図

まま〔無人島長平〕にもあてはまっている。また、「おのれ一箇の好奇心に映った土佐の風土・人間・歴史を軸に紀行文を綴る」という指摘も〔無人島長平〕の理解に有効な見方と思われるが、その好奇心の方向性については順次この後追究していきたい。

まずこの段階で確認できることは、実際は「豪勢な招待旅行」であり、用意された名所旧跡の定番コースを借り上げバスで団体の一員として巡回したにもかかわらず、発表された文章ではあたかもぶらっと一人旅に出た際の見聞を綴っているような印象を与える、という点である。この時の旅行の行程を記録的に綴った田中貢太郎の随筆「土佐紀行」(昭和一〇年五月一六日)の日付あり。随筆集『杖頭錢』昭和一〇年八月、芸社、所収)によれば、一行は、五月四日は「土佐観光協会の案内で」高知市とその東郊の一宮神社、国分寺、紀貫之の邸跡、山田町(現・香美市土佐山田)の長尾鶏、龍河洞などを回った後、岸本町(現・香南市香我美町岸本)の土御門上皇の旧跡、夜須村(現・香南市夜須町)の海水浴場、手結(現・香南市夜須町手結)の餅屋などを訪れている。また六日は「野村自動車会社の大きなバスに乗って」室戸岬に向かう途中、再び手結山の餅屋に寄っている。田中の「土佐紀行」には長平に関する記述は見当たらないが、宇多の松原(岸本海岸)の共同墓地が東へ向かう主要道路に隣接していることから、五月四日もしくは六日、記述がなくても一行が長平の墓に立ち寄った可能性は考えられる。井伏の土佐旅行においてある程度の単独行動の余地は否定できないが、彼がこの団体に加わっている以上、一人で宇多の松原を訪れ長平の墓に行くとしたとは考えにくい。ここには、「おのれ一箇の好奇心」によって実際の経験に取捨選択や変容を加え、単なる事実の見聞記とは異なるものが生み出されていると見なければならぬ。なお、長平の墓との出会いについては、この後取り上げる長平漂流譚の典拠とも関連してくるので、そこで再び

言及することとする。

名所旧跡に言及しつつ紀行文ふうの書き出しで始まったあと、「無人島長平」の記述は長平を中心とした漂流から生還に至る物語に移行していく。分量としては、「無人島長平」全体は八千字あまりの文章で、うち冒頭部分は約二千文字なので、はじめの四分の一程度が紀行文的部分、残りの四分の三が長平たちの漂流譚といった割合である。

次に「無人島長平」で井伏が描き出した長平像について見てみると、そこには井伏の「おのれ一箇の好奇心」によって描かれたある偏向を伴う長平像がはつきりと認められる。それは、次のような箇所にあらわれている。

・田圃の畦みちには野生のままに楊梅の木が生えてゐて、その畔みち伝ひに行くとおそらく共同墓地と思はれる墓地があつて貧弱な墓石がたくさん並んでゐる。たいていどの田舎に行つても、臨海の部落のそばには多く岸辺に墓地がある。松原のなかや砂丘のかげや葭原のなかなどに、きつと漁村の貧しい暮しの思ひ入れよろしく、形骸なきまでに風化された小さな墓がならんでゐる。長平の墓も海岸のさういふ定石通りの墓地にあつて、しかも長平の墓は他の墓に比べて更らにみすばらしい。無人島から帰つて来てからの長平の生活が、晩年あまり恵まれたものでなかつたことが想像されるわけである。

・長平は無学の男であつたものと見え、彼みづから書いたといふ手記は伝はつてゐない。封建時代の土佐の岸本村船頭長平は、十三年間も無人島で日を送ることが可能であつたくらゐ強靱な神経を持つてゐて、あくまでも体力的に頑健で且つあくまでも無学であつたも

のに違ひない。

・長平は沈着に庭さきに立ち、江戸で覚えたさはやかな弁舌で十三年間の思ひがけない冒険談を語つたといふことである。

・この長平の墓が土佐の岸本浦の松原に残つてゐる。高さ一尺あまり幅七寸くらゐの貧弱きはまる墓石である。

三番目の引用文に「沈着」で「さはやかな弁舌」とあるのは、後述する典拠の「性来伶俐なる長平は早くも其の意を悟りまして庭前に停立した儘遭難以来の概略を物語りましたれば（略）」の部分がある程度生かしつつ井伏流に書き換えた結果、肯定的な印象の長平像となつたと考えられる。その他の引用例では、墓石の貧弱さと後半生の不遇さ、強靱な神経と頑健な身体を持つていたので生還できたまでで、あくまで無学な一介の船乗りといった否定的な印象を強調した記述になっている。このように井伏の描く長平像が、墓石の貧弱さ、無学、不幸・不遇さを強調した否定的なものであることをまず確認しておきたい。

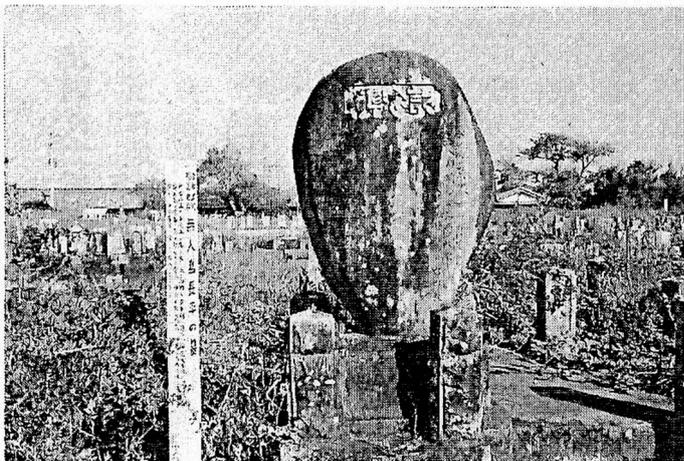
### 三、「無人島長平」の典拠をめぐって

すでに触れたように、この「無人島長平」の漂流譚の部分については、種本として用いた典拠があり、それは堀部功夫氏によって説明されている。氏によれば、井伏が典拠としたのは、大正十五年二月発行の『長平嶋物語』で、編集発行は岸本町青年団、筆者は森下高茂。典拠（森下本と称されている）と「無人島長平」本文との対応関係の検証によって、「井伏随筆のあらましは、森下本の無断リライトによって成立する」との

堀部氏の断定に疑問の余地はない。つまり、「無人島長平」の四分の三にあたる漂流譚は、典拠を半分以下に縮めて書き直しているわけである。

『長平嶋物語』出版の経緯は、「はしがき」（大正一四年七月付け）に明記されている。それによると、地元岸本町の青年団は地域で語り継がれてきた長平の「奮闘的精神、創造的生活、協同生活の有難さ」を顕彰するため、具体的な活動としては「墓地を修理すること」「その記録を保存する」ことを企画した。そのきっかけとなったのは、二年前、森下高茂が『高知新聞』に長平の漂流記を連載したことで、青年団は「記録の保存」として改めて森下に執筆を依頼した。本書には森下自身の「緒言」もあり、そこには、たまたま入手した二種類の写本をもとに長平漂流記を新聞に連載し、青年団の依頼に対しては「長平の如き埋没せる英傑を世間に顕彰したき熱心より慙も遠慮も顧みず之を快諾」したとある。このような経緯から、新聞連載時の文語体を口語体に改めて『長平嶋物語』は実現した。

なお、岸本町青年団の長平顕彰事業は『長平嶋物語』出版では終わらず、翌昭和二年三月、高さ約一・四メートル、幅約一メートルの自然石にこの顕彰事業の趣意を刻印した記念碑を墓石の近くに



記念碑と墓石

建立している<sup>9)</sup>。

井伏がこの『長平嶋物語』をどのように入手したかに関連する記述として、後年の随筆「いろいろの艸紙」(初出、昭和三十一年一月、『群像』)があり、そこには、

いつか私は土佐へ出かけた折、宇多の松原の近くの墓地で「無人島長平之墓」と刻んである墓を見た。平凡な小さな墓にすぎなかつた。しかし私はその前日あたり、高知の古本屋で買った長平の「漂流日記」を読んだので、しげしげとその墓を見たのであつた。

と書かれている。この「土佐へ出かけた折」とは昭和十年五月のことだとすると、この記述の内容はそのまま受け取るわけにはいかない。なぜなら、次のような疑義が生じるからである。高知の古本屋で買って読んだという「漂流日記」は、注(5)の論文で堀部氏が指摘しているように、石井研堂編『漂流奇談全集』(明治三十三年、博文館)所収の「漂流日記」を指す。もし昭和十年五月の土佐旅行で『漂流奇談全集』もしくはその流布本所収の「漂流日記」を入手し読んでいけば、直後に書かれた〔無人島長平〕の本文にそれが反映されてなく、別の典拠(森下本)に基づいているというのは不自然である。また、右の引用のすぐ後には「無人島長平の『漂流日記』は長平自身が書いたものだと云われてゐる。御用船の勤めをしてゐた船頭だから文字を綴ることはできたらう。」とあり、「あくまでも無学」とする〔無人島長平〕の長平像と矛盾する。

この資料を巡る不自然さや長平像の矛盾については、「いろいろの艸紙」が土佐旅行から二十年以上もたった時点での回想であることから、井伏の中に記憶の混乱があつたとひとまず推定しておきたい。「いろいろの艸紙」は、漂流民を描いた長編小説『漂流民宇三郎』の連載(昭和二九年四

月(三〇年一二月)が完結した直後にその連載誌である『群像』に発表されたもので、創作に際して出会った江戸期の漂流に関する数々の資料に言及した内容になっている。早くから漂流・漂流民に関心を持っていた井伏ではあるが、〔無人島長平〕執筆以後も漂流に関する資料の収集が続き、おそらくその過程で『漂流奇談全集』所収の「漂流日記」に出会つたものであろう。そして、時間の経過とともに記憶の混乱が生じ、昭和十年の土佐旅行で入手したであろう森下本『長平嶋物語』と後になって入手した「漂流日記」とが混線してしまったのではないだろうか。また、『漂流奇談全集』所収の「漂流日記」冒頭には、「校者曰、漂客の手つから記したる航海日誌は、いと珍らし、文辭の拙きを咎めず、同情もて読み往けば、自ら落涙を禁ずること能はず」(傍線・引用者)とあり、井伏は、漂流日記は長平自身が記したとする石井研堂のこの言葉を踏まえて、「いろいろの艸紙」では識字能力のある長平像を思い描いたのであろう。典拠となつた『長平嶋物語』を巡つてこれまでのことを整理しつつ、もう少し視野を広げておきたい。

井伏は、おそらく昭和十年五月の土佐旅行で『長平嶋物語』を入手した。その経緯は詳らかでないが、旅行中長平のことが話題になつた時、地元の誰かがこの本に関する情報を提供したという可能性も考えられる。十年ほど前に新聞連載と出版があり、また記念碑の建立もあつて、高知では長平に関して一定の認知度があつたと思われるからである。いっぽう井伏の方は、相馬正一氏の指摘<sup>10)</sup>のように、前年(昭和九年)の「青ヶ島大概記」執筆に用いた資料「八丈実記」のなかに長平に関する記述が含まれているので、その時点で長平について認識していた可能性は高い。つまり井伏は、漂流や漂流民・長平に対して一定の関心と予備知識をもって「豪勢な招待旅行」に加わり、他の名所も巡るなかで岸本海岸(宇多の松原)の共同墓地の一角で長平の墓石に出会う、そういう流

れの中で『長平嶋物語』も含めた長平に関する情報を入手していったと推測される。かつて浦田佑氏はまだ典拠が指摘されていない段階で「井伏はこの旅行を利用してその近辺を取材して回ったことは明らかであり」と書いたが、「無人島長平」が『長平嶋物語』のリライトで成り立っている事情からすれば、井伏の積極的な取材行為の可能性はあまり高くないだろう。

もう一点、典拠『長平嶋物語』に関して触れておきたい。この書には、次のような口絵写真が一枚ついている。



口絵写真

共同墓地と思われる一角に「無人嶋野村長平之墓」と書かれた標柱とともに墓石が写っていて、その様子は、標柱を除けば、先に引用した「みすばらしい」「貧弱な」という井伏の墓地風景の表現と矛盾するものではない。この写真の撮影時期は不明だが、新しくても出版時点の大正十五年二月を下ることはなく、また青年団による墓地の修理も終わっているようには見えない（昭和二年建立の記念碑には、「漂流傳記」〔長平嶋物語〕のこと）の「純益ヲ以テ墓所ノ周囲ヲ修理セリ」と刻まれている。これに対して、井伏たちが訪れた（と推測する）昭和十年の長平の墓に

は、前述のように立派な記念碑が近くに設置されていたはずである。記念碑があり修理されたであろう墓地の風景は、十年近い歳月で叢に覆われ気味であったにしても、この写真とは大きく異なっていたと考えられるが、井伏の文章はまるでこの写真のたまたまを写し取ったかのような印象を与える。ここからは更なる重大な疑念（ひょっとして井伏は長平の墓石すら実見しておらず、この写真をもとに文章化しているのではないか）が出てきそうだが、その点は五節で再び言及することとする。

#### 四、長平に関する文献資料とそこに描かれている長平像

前節の堀部論の中には長平に関する文献資料の情報も多く含まれていて、小稿もそれに負うところが大きい。その情報も含めて長平に関する文献を大別すると、①当時の役所の調書等の公的な記録、およびその複製、②（拡散したであろう）①の資料を使って、長平を主人公に小説・物語のスタイルで描いたもの、③（①の文献を主要資料とした）漂流、漂民についての学術的・研究的著作、のような区分けができよう。それぞれの例として、把握した範囲で挙げると次のようなものがある。

##### ①の例

a、『土佐國群書類従 卷第八十下』所収「無人島漂流記下 岸本長平 無人島江漂流之覚」（吉村春峰編 明治一四年〔一八八一〕 活字 本は平成一七年〔二〇〇五〕 高知県立図書館編集発行の第七巻 所収）

b、『漂流奇談全集』（石井研堂〔民司〕編 明治三三年〔一九〇〇〕 博文館刊）所収 「漂流日記」（前出） 再編本『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集 第一巻』（山下恒夫再編 平成四年〔一

- 九九二) 日本評論社刊) に所収
- c、『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』(谷川健一編集 昭和四三年(一九六八) 三一書房刊) 所収の「無人島物語」
- d、『日本庶民生活史料集成 第一巻 探検・紀行・地誌 南島篇』(谷川健一編集 昭和四三年(一九六八) 三一書房刊) 所収の「八丈実記」(前出)

## ②の例

- a、『土佐の長平 漂流ばなし』 北村重敬 明治三四年(一九〇一) 開発社刊

- b、『長平嶋物語』(前出) 森下高茂 岸本町青年団 編集兼発行 大正一五年(一九二六)

- c、『水夫長平無人島漂流記』 南洋一郎 昭和一八年(一九四三) 偕成社

- d、『長平漂流記』 宮田定繁 昭和三八年(一九六三) 高知県立中芸高等学校(非売品)

- e、『漂流』 吉村昭 昭和五一年(一九七六) 新潮社

- f、『無人島長平物語』 近藤勝 平成八年(一九九六) 高知新聞社

- g、『アホウドリ』と生きた12年 無人島と少年船乗りの物語』 岡本文良 平成一〇年(一九九八) PHP研究所

- h、『にっぽんロビンソン 土佐の長平・無人島漂流記』 三田村信行 (絵・田中楨子) 平成一〇年(一九九八) ポプラ社

## ③の例

- a、『鳥島漂着物語—18世紀庶民の無人島体験』 小林郁 平成一五年(二〇〇三) 成山堂書店

- b、『江戸時代のロビンソン—七つの漂流譚』 岩尾龍太郎 平成一八年(二〇〇六) 弦書房
- c、『漂流の島—江戸時代の鳥島漂流民たちを追う』 高橋大輔 平成二七年(二〇一五) 草思社

このほか、江戸後期、松平定信の随筆『花月草紙』(『日本随筆大成第三期第一巻』所収 昭和五一年(一九七六) 吉川弘文館)のなかに漂流に関する記述があり、②のaにも引用されている。

また、映像資料として、②のe(吉村昭『漂流』)を原作とする映画作品「漂流」(監督・森谷司郎 昭和五六年(一九八一))がある。

長平を顕彰する活動としては、前述の大正末・昭和初めの岸本町青年団によるもののほか、生還二百年目にあたる平成十年(一九九八)、地元では次のようなイメージ像が建立され、またイベント「無人島長平まつり」が開催されている(現在は休止)。



イメージ像とともに設置されている墓石、記念碑

さて、これらの文献や映像資料、顕彰活動の中で長平はどのように描かれ取り扱われてきたであろうか。主に文献資料の②に描かれた長平像を見てみよう。

a 『土佐の長平 漂流ばなし』—この書では、年少者に向けて語り掛ける文体で、長平を海洋進出の先駆けとして描いている。前書き「読者につぐ」には、「此の本を公にする主意は、日本人の島国根性を打破したいといふにあるのだ。(略)さしあたり海事思想を啓発して、航海探險貿易移住植民等の念慮を起さすが捷徑だと思ふ。」とあり、また筆者の創作部分として、長平がお上に対して無人島探索の必要性を献策するという具合に、この時代らしく楽天的な対外膨張論に立って、長平を無人島発見の功労者、海国日本の模範的健児として描いている。

b 『長平嶋物語』—すでに触れてきたように、この書には発行を企画した地元青年団と著者・森下との両者の前書きがあり、そこに長平に対する見方が端的に示されている。青年団は「長平氏の奮闘的精神、創造的生活、協同生活の有難さを想ひ」、森下は「長平の如き埋没せる英傑を世間に顕彰したき熱心より」、それぞれ長平を後進の目指すべき指標と位置付けている。

c 『水夫長平無人島漂流記』—これも序文「なぜ、私は本書を書いたか」の次のような部分に筆者の見方がよく表れている。「これらの漂流記を読むと、日本の船乗がむかしからいかに剛健で不屈の精神を持ち工夫の才能にゆたかか信仰、感謝の念がつよいか、そして、いかに団結力に富んであたかわかり、世界無比の現代日本の海員魂とは彼等のやうなむかしの船乗から伝わって来たものであることがわかる。」

d 『長平漂流記』—地元高校の教師による手作り本で、「(略)十年間言語に絶する苦勞をしたその忍耐力、何物にも挫けない不屈の精神力、物資として何一つない孤島で、衣食住を解決して生きぬいた創造性、只々驚嘆

の外ありません。(略)長平は土佐の誇りであります。私はこの土佐の誇りを単に昔物語に終わらせたくはありません。いつまでも我々土佐人の心の火として燃え続けさせたいものと思います。」とする序文がある。

e 『漂流』—冒頭部分で作者は、太平洋戦争のあと終戦を知らずに孤島に取り残された日本人がひき起こした「アナタハン事件」や戦後長く密林に潜んでいた横井庄一氏・小野田寛郎氏の事例をあげて、彼らのことを「戦争という激しい潮流に押し流された漂流者たちなのだろう」ととらえ、また、「江戸期の漂流者たちも、幕府の政策の犠牲者であったと言うことができる」と書いている。軍国主義や鎖国政策への批判を外枠とし、その内側に絶望的な状況にあっても精いっぱい奮闘する長平たちの人間ドラマを描いている。

f 『無人島長平物語』—本文中の「一年と五カ月余にわたり(長平がたった一人でいた期間・引用者)孤島・鳥島の完全孤独に耐えぬいた、長平の耐性・適応性・体力こそは、土佐人への偉大な教訓として、永久に語り伝えられねばなるまい。」に、筆者の姿勢がよく表れている。

g 『アホドリ』と生きた12年 無人島と少年船乗りの物語—年長者向けに、長平を一三、四歳の聡明で忍耐強い少年に作り替えている。「あとがき」に、「わたしは、その話に創意工夫、忍耐、なにごともありらめてはいけないことなど、人間が生きていくために必要でたいせつな心のもち方がしめされているような気がして、この物語を書こうと思ひ立ちました。」とある。

h 『につぼんロビンソン 土佐の長平・無人島漂流記』—「わたしが、岸本浦の長平です」と長平が一人称で漂流体験を語り始める設定で、gと同様年少者向けに作られ、いくつもの創作部分も加えつつたくましく生き抜いた長平の姿が描かれている。

以上、小説・物語のなかの長平は、強弱の差はあっても、傑出した偉

人・英雄であり、その不屈の精神、創意工夫、協調性などの点において後進の学ぶべき範として位置付けられている。

松平定信の随筆『花月草紙』（前出）にも、「としぐ／＼えみしの国へ吹きながさる、船子ども、命またうしてかへりくるものもあることなり。かならず二三十人のりて出づるが、おほく死して、かへるはふたりみたりに過ぎず。（略）されば一船のうちの英雄、かならず生きのこりてかくあるなりけり。」とあり、同時代の見解としても「英雄」のみが生還できるとしている。

このように長平を傑物として偶像視する大方の見方に比べ、井伏の描く長平像は大きく異なっている。無学で不遇な一介の船乗りといった表現は、井伏のどのような視線の向け方によって生まれるのだろうか。次節では、その点について検討したい。

## 五、井伏が描く長平像の特異さとその創作姿勢

これまでも言及してきたが、「無人島長平」に関する先行研究に次のようなものがある。

・井伏はこの旅行を利用してその近辺を取材して回ったことは明らかであり、おそらくこのことが引金となって、さらに充実したジョン万ものへと井伏の興味は向かっていったものであろう。

（涌田佑「『ジョン万次郎漂流記』—その、井伏文学に占める位置」前出）

・井伏が十三年に及ぶ長平漂流譚に興味を示していた時点で、のちと同じ体験をしたジョン万次郎が視野に入っていたことはほぼ間違

いあるまい。

・井伏が「無人島長平」及びその続編を書くに当って、「青ヶ島大概記」で参照した資料を援用していることは間違いない。実は『八丈実記』の中に長平らに関する資料はかなりふくまれているので、「青ヶ島大概記」執筆の時点で長平に関する記録も読んでいたはずである。それが土佐旅行の時、長平の墓と対面したことによって一挙に（無人島長平漂流譚）へと発展したものと思われる。

（相馬正一『続 井伏鱒二の軌跡』前出）

・井伏は、この森下本にただ、土佐紀行を付加し、長平の不幸を強調し、顕彰運動を無視したばかり、ということもできる。

・井伏の関心は長平の不遇に傾いている。

（堀部功夫「『無人島長平』の主典拠」前出）

・井伏が注目するのは、宇多の松原で目にした見窄らしい長平の墓である。「あくまでも無学であつたに違ひない」（「無人島長平」と断定する長平に本格的な関心を寄せて、後の漂流ものに接続する「無人島長平」「長平の墓」という二篇を書く。

（前田貞昭「井伏鱒二の土佐への旅—〈博浪沙〉招待旅行と井伏紀行文」前出）

涌田説、相馬説とともに、典拠が発見されていない段階での論で、「無人島長平」を井伏の漂流民への関心が高まっていく一つのステップとしてとらえている。

前田説は、典拠発見後の論だがその視点からの言及はなく、涌田、相馬両氏と同じく、のちの漂流民ものへ接続する作品と位置付けている。井

伏が「見窄らしい長平の墓」や「無学であつた」ことに注目している点を指摘しているのは、堀部説と共通する。

前三者に対し堀部氏は、この「無人島長平」をただ漂民ものの系譜のなかの一過程と見るだけでなく、この作品の特異さを短い言葉ではあるが言い当てている。「長平の不幸を強調し、顕彰運動を無視し」、「井伏の関心は長平の不遇に傾いている」という見方は、「無人島長平」の特異さを十分にとらえていると思われる。

以上の研究史をうけて改めて問題提起をすると、小稿は、この堀部氏の言う井伏の「傾き」、前田氏の言い方では「おのれ一箇の好奇心に映つた」ものを綴っている、という指摘を引き継いで、その内実に迫ろうとしているわけである。

ここで三節の終わりで提起した疑義（井伏は長平の墓地を実際には見えないのでは？）について、別の角度から拡大しておこう。三節では、口絵写真の墓地風景と井伏の描写との類似性を理由としたが、もう一つ、墓石の描写の点でも典拠とのつよい重なりを認めることができる。初出形「無人島長平の墓」の末尾（この部分は、前半の「無人島長平」とつないだ場合重複するので、単行本収録の際削除されている）と典拠『長平嶋物語』の森下の「緒言」からそれぞれ引用してみる。

貧弱きはまる墓石のおもてに「無人島野村長平」と記してある。

墓石の右側面には文政四巳年と記し、左側面には四月八日と記してある。苔むして、尚ほさら簡朴の味はひを深めてあるやうである。

ここの松原を宇多の松原といひ、紀貫之の土佐日記には「かくて宇多の松原を行き過ぐ（中略）もとごとくに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ」と云つてある。しかしいまでは鶴は飛んでゐない。潮風に松の枝が鳴り、文学的には月並みであるかもしれないがあくまでも

健康向きの海浜風景である。

（初出形「無人島長平の墓」の末尾）

一昨年香美郡巡遊の時に岸本町にて曾て土佐のロビンソンと云はれました有名なる漂流人野村長平の墓を訪ひました。墓は同浦青松の蔭、白砂の間、彼の古の歌聖紀貫之の名記文に『かくて宇多の松原を行き過ぐ其松の敷いくそばく、千年経たりと知らず、もとごとくに浪うちよせ、枝ごとに鶴飛びかふ』と記しました。宇多の松原にありまして、其の苔蒸す一小碑石の正面に無人嶋野村長平、右側面に文政四巳年、左側面には四月八日と簡朴に記しある所に反つて千萬無量の幽趣味ある様に感じました。

（典拠『長平嶋物語』の森下高茂「緒言」の冒頭部分）

この二文を見比べると、墓石に刻まれている文字の説明や土佐日記の引用、「簡朴」「苔むす」の語彙使用などの点で、井伏は森下文をリライトしていると言うしかない。森下「緒言」にある「右側面」「左側面」というのは、口絵写真では確認しづらいが、墓石正面の同一平面での文字の配置を説明しているのであって、「右の側面」「左の側面」の意味ではない。このような誤解されやすい言葉を井伏がそのまま踏襲している点は何よりの根拠となろう。リライト（書き直し）は、長平たちの漂流譚の部分だけではなかったわけである。

このような理由から、井伏は実際は長平の墓を見ておらず（そして記念碑の存在も知らず）、典拠の口絵写真と「緒言」の文言にもとづいて長平の墓地風景を綴ったのではとの疑問が生まれるが、しかしまた、旅行のコースから考えて実見した可能性を排除するのも難しい。したがって、この点は留保したまま井伏が長平を描くときの特異性を検討するし

かないのだが、その際、実見か否かはそれほど意味を持たないだろう。なぜなら森下「緒言」のリライトにおいても、森下が苔むした墓石を「千萬無量の幽趣味」と言うのに対して井伏は「貧弱きはまる」と言っているように、井伏は井伏自身のまなざしを向けているからである。堀部氏は当該論文で、井伏が記念碑を含む長平の墓地を実見していることを前提として「長平の不幸を強調し、顕彰運動を無視した」と述べているが、仮に墓地を見ていなくても、「無人島長平」からこのような捉え方を導くことは可能なはずである。井伏は、手にしている『長平嶋物語』自体が顕彰事業の産物であり、長平が後進の賛仰する対象であることを知りつつ、無学で不遇な点を強調しているのだから。

では、井伏はなぜ長平に対してこういう傾きのある否定的な見方をするのかについて検討してみよう。断定的な見解は無理でも、一つの推論を示すことができればと思う。

一つの手がかりは、その他の土佐旅行にもとづく文章も含めて見た場合に伝わってくる、ある「過酷な」もの、「酷薄な」ものの印象である。例えば、「初夏の室戸岬」(昭和一〇年五月、前出)の冒頭は、前年の室戸台風による被害の様子から始まって、「或る部落のごときは家も屋敷もすっかり波にさらはれ地の底の磐石が露出して、岩のそそり立つ渚に変じてあるものもあつた」と、大きな自然災害の爪痕を書き留めている。また、「土佐遊覧」(昭和一〇年七月)では、「清岡道之助等二十三人が斬罪に処せられた刑場の跡がある」や「維新の物語を鮮血で色彩づけた闘士の遺跡が豊富である」のように、政治的な対立抗争による悲惨さに目が向けられている。

さらに、これは後の記述になるが、「へんろう宿(私の描いた四国)」(昭和三四年二月)では、かつての土佐旅行で見た貧相な遍路宿や貧しげな子供たち(素足、裸に前掛けだけ締めた姿)、子供を連れだ狡猾な夫

婦ものの巡礼者(天然記念物の野生の橘の枝をこっそり折り取っていく)など、日常の中の貧しさや狡猾さの記述も印象に残る。

全般に井伏の随筆は話題が自由に横滑りして、悠揚迫らざるその行文が味わいを生み出している。また深刻な内容もユーモアによって中和されることが多いので、右のように一部を取り出してしまおうと全体の読後感にそぐわなくなるくらいはある。そのことに十分注意しつつ、再度(無人島長平)冒頭の土佐紀行的箇所を吟味してみると、そこにも次のような「過酷な」ものへの傾斜が認められよう。

長平たち遭難の顛末は典拠『長平嶋物語』をリライトするわけだが、漂流発端の場面で「にはかに激しい西風が起こつて東南の方向に漂流した」と書いたあと、「土佐の海は『二八が荒れる』といつて」や「去年九月の大風の際にも、室戸岬に吹きつけて来た颯風は沿岸の民家を吹き飛ばした」のように、人々が自然の脅威に向き合つて暮らしていることを書き加えている。その自然災害から守ってくれる良港として野中兼山開鑿の手結港に話題が移り、そこは「(室戸台風による)風害の跡はあまり見えなかつた」と観察している。

続いて手結港の裏山にある餅茶屋に話を切り替え、政争によって悲惨な最期を遂げた江藤新平、そして承久の乱で配流になった土御門上皇へと、政治社会の中で起こる一種の「災害」ともいえる出来事へとつながっていく。このあたりの展開は非常に滑らかで、自然災害に関連して野中兼山に言及するが、その兼山も晩年は失脚し幽閉され、兼山没後も男系が絶えるまで一族が四十年間も幽閉されたという悲惨な事情を思うと、自然の猛威に脅かされる人間と政争・政変によって翻弄される人間とが区別しがたく重なって見えてくる。このように、リライトとは言え嵐によつて遭難・漂流する長平たちの物語を綴っていくにあたって、井伏は土佐旅行で見聞したことの中から、とくに深刻な自然災害や苛烈な政争

にまつわる悲惨さにまなざしを向けていることが確認できる。単に「定番」の名所をつなげただけではないのであって、この辺に「おのれ一箇の好奇心」の発動が見られよう。

いっぽうリーダー格・田中貢太郎の「土佐紀行」(前出)には、激甚な被害をもたらした室戸台風への言及は一言もなく、五月六日の室戸行の記述には「唐の浜と云ふ処は、家ごとに橙の木があつて、ちやうど其の花のさかりであつたから、花の匂がぶんぶんと車の中へ入つて来た。／＼橙の花匂ひけり磯の家／＼途中で枇杷を買つて喫つた。」とあって、ずいぶん趣を異にしている。こちらは、のどかな吟行報告といった文章である。

井伏の描く長平像とその創作姿勢を考える次の手立てとして、『ジョン万次郎漂流記』(昭和二年、書下ろし)と比較してみよう。『ジョン万次郎漂流記』も伊藤眞一郎氏の指摘<sup>13)</sup>のように先行テキストをリライトしたもので、その点も含めてこの作品をどう評価するかは別の機会に論じるとして、ここでは同じ漂流譚でありながら大きく異なる二人の主人公像に絞って考えてみたい。

二作品は題材面では漂流とそこからの生還という点で共通するものの、万次郎のほうは、勤勉・惻発・胆力といった美質で困難を乗り越えていく姿に作者の目は向けられている。帰国後、幕府に重用される万次郎の後半生はごく簡略にまとめられているに過ぎず、井伏が丁寧に筆を進めているのは、漂流に始まる一つ一つの困難を克服し人生を切り開いていくその姿である。作品末尾に「ただ一つ思ひ出しても胸の高鳴る欲望は、捕鯨船を仕立て遠洋に乗り出して鯨を追ひまわしたいといふ青春の夢であつた」とあるように、夢を追いかける明朗な主人公像が印象付けられている。

他方長平のほうは、困難の程度ではより大きな困難に遭遇したと言えそうだが、井伏は、「強靱な神経」と「体力的に頑健」であることにより

生還できたままで、生還できたことも含めて、長平の存在そのものを不遇・不幸と見なしているように見える。一介の船乗りが野村姓を賜り六十歳まで生き、墓石も作られてあれば、決して不幸とは言えないとするのが常識的な見方かもしれない。しかし、井伏はそういう常識的・世間的な価値観で見ているのではなく、また多くの小説・物語類が描いてきたような「不屈の精神」「創意工夫」に価値を見出すのでもなく、過酷な運命に翻弄される小さな人間のどうしようもない哀れさのようなものを長平の墓石に見ているのではないだろうか。初出「無人島長平」の末尾には「無人島において長平たちの本国に帰りたいと熱望してゐた意欲に私は興味を感じてゐる。その意欲は人間の生きて行かうとする意欲と相似形のものであつて、人間の生命力といふものほもとと投げやりな気分を含有してゐないことが痛感される」と書かれていて、この部分は単行本収録の際削除されたが、井伏は絶望的な環境の中でも生を全うしようとするひたむきな姿を確実に凝視している。そしてその上で、長平と万次郎、どちらも過酷な運命に曝され、そこから奇跡的に生還したわけだが、一方は人間の可能性を肯定する視点から描かれ、他方は弱小人間の哀れさを見てしまう視点から描かれている、と思われる。この後者の視点(長平に人間の哀れさを見る視点)こそ、井伏らしい創作姿勢と言えるのではないかと考える。

さらに、このような人間を押し流していく無慈悲な運命への眼差しという角度から(「無人島長平」をとらえたとすると、五年後に書かれる「へんろう宿」もこの線上に位置づくことになろう。「一泊三十銭」と書かれた貧相な遍路宿から構想したというこの作品には、四国遍路の旅人によつて捨てられた嬰兒(女兒)たちが、この「災害」としての過酷な運命を受け入れ、それを背負って代々宿を経営する姿が透明感のある筆致で描かれている。

## 六、おわりに

〔無人島長平〕は、漂流という題材の面では『ジョン万次郎漂流記』へと接続するが、『災害』の中に放り出された人間という点で見れば、むしろ「へんろう宿」に強くつながっていると言える。東郷克美氏がかつて、

へんろう宿の人々が特別に「妙な一家」なのではなくて、それが庶民一般の生のありようと重なって見えて来るところに、この作品の象徴的な味わいがあるのである。人は誰でも運命という名の神によって、不条理なこの世に置き去りにされた「棄て児」ではないか。<sup>14)</sup>

と述べたように、人はみな「棄て児」ではないかという見方は、人ほみな「漂流者」ではないかという読み方を〔無人島長平〕から導いてくれる。井伏が長平に向けるまなざしのなかには、このようなまなざまなざまなざまに遭遇し、不条理な世を漂流する人間のすがたが重ねられていたのではないだろうか。

人間を大きな力で翻弄し押し流していくもの―、その由来が自然であろうと政変であろうと、また日常の中の貧困や貧困ゆえの棄児であつても、それらを広い意味での『災害』として括ることによって、井伏文学に対する新たなアプローチが可能になると思われる。<sup>15)</sup> 小稿は、そのような枠組みのもと〔無人島長平〕を中心に（土佐もの）の考察を試みた。

## 注

(1) 井伏の戦前の五回の高知訪問は次のとおり。

昭和一〇年五月初旬、『博浪沙』同人と土佐旅行に参加。

昭和一四年四月中旬、『博浪沙』同人と二回目の土佐旅行。

昭和一五年二月、重病の田中貢太郎を見舞って安芸町（現・安芸市）を訪問。高知滞在中、小説「へんろう宿」を執筆、四月雑誌発表。

昭和一六年二月、田中貢太郎の葬儀参列のため来高。

昭和一八年七月、田中貢太郎記念碑除幕式参列のため来高。

(2) 井伏の高知訪問及び高知に言及した作品に関する詳細な調査・研究として前田貞昭氏の次の論考があり、本稿の多くもその成果に負っている。

・井伏鱒二の土佐への旅―〔博浪沙〕招待旅行と井伏紀行文―

『井伏鱒二と中・四国路』ふくやま文学館、二〇〇六年  
・井伏鱒二の土佐行き（昭和一五年・一六年・一八年）について

『兵庫教育大学研究紀要』第三十卷、二〇〇七年全集（筑摩書房、一九九六―二〇〇〇年）による。

(4) 典拠『長平嶋物語』は総ルビであるが、引用に際してルビは適宜省いた。

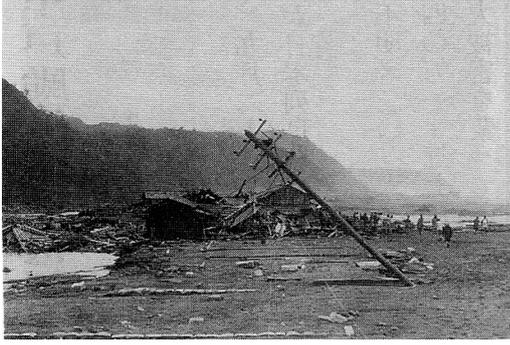
(5) 堀部功夫『無人島長平』の主典拠『池坊短期大学紀要』第三一号、二〇〇一年

(6) 本文始まりに「ちようへいじまものがたり」のルビがある。四六判、口絵写真一枚、はしがき等一〇頁、本文四九頁、一頁三〇字×一〇行、一二ポイント、総ルビ。外観は小冊子体。

(7) ただし、青ヶ島に関する記述の一部には『長平嶋物語』以外の資料を踏まえている箇所が認められる。

(8) 新聞連載時の本文は確認できていない。

(9) この記念碑と墓石の写真は『香我美町史下巻』（香我美町史編纂委員会、一九九三年）第10章「文化財・民俗」に掲載されているもの。「長平墓地内の一隅にあり」と説明があるが、撮影時期は不明。記念碑建立の時点（昭和二年）からは一定の時間が経過していると思われるが、おおよそ建立当時の様子を偲



室戸岬町（現・室戸市）  
耳崎地区の高潮による流失跡



室戸岬町（現・室戸市）  
西部の流失集落跡

の室戸台風【『土佐史談』二二四号、二〇〇三年、より】。井伏の文章が誇張でないことが分かる。

ぶことはできよう。なお同町史によれば、長平墓地を含む岸本地区の共同墓地は、長年「地区開発のネック」であったことから、平成五年（一九九三）、移転改葬されている。その後平成十年（一九九八）、後述の長平生還二百周年記念事業の一環で造られた「イメージ像」とともに墓石、記念碑の三点が、土佐くろしお鉄道「香我美駅」南側の広場に設置され現在に至っている。

(10) 相馬正一『続 井伏鱒二の軌跡』津軽書房、一九九六年

(11) 涌田佑「ジョン万次郎漂流記」―その、井伏文学に占める位置」『作家・作品シリーズ7 井伏鱒二』東京書籍、一九八〇年

(12) 室戸台風―昭和九年（一九三四）九月二日、室戸岬付近に上陸し、京阪神地方を襲った超大型台風。上陸時の最低気圧911ヘクトパスカル。大阪湾などに高潮をもたらし、全国の死者・行方不明者は三〇三六名に達した。（デジタル大辞泉より） 高知県東部の被害も甚大で、死者・行方不明者二二〇名超。写真のように高潮により集落ごと流失した地区がある（島村泰吉「記憶の中の室戸台風」【『土佐史談』二二四号、二〇〇三年、より】。井伏の文章が誇張で

(13) 伊藤眞一郎「『ジョン万次郎漂流記』の主典拠」『近代文学試論』20号、一九八三年

(14) 東郷克美「『へんろう宿』―作品の深さについて―」『国文学 解釈と鑑賞』五〇巻四号、一九八五年四月

(15) 次の拙稿を参照されたい。「井伏鱒二の『災害』文学 ―『御神火』『黒い雨』を中心に―」高知県立大学紀要 文化学部編67巻 二〇一八年三月

